《紹　介》

稲野藤一郎著

『ハサとニホ——我国における稲慣行乾燥方式の実態調査』

（自費出版・1981年）

堀　尾　尚　志*

著者は20年以上にわたって，くまなくと言ってよい程，全国を回り稲作の慣行作業を調査されてきた。そのなかから，乾燥作業についてまとめられたのが本書である。この書を語るに多くの言葉はいらないであろう。掲載された写真が357葉という数が示すとおり，丹念に全国の慣行作業を写真に収められた，その努力に敬服するのみである。それぞれの土地にいる人びとは，永年続けてきた慣行作業を当たりまえのこととして特別の注意を払ってこなかった。多くの慣行作業が機械化により消えてしまった今，当たりまえのことを記録しておくことの大切さを，本書を前にして今さらながら思うのである。

本書の目的は，書名の示すとおり架干と地干あるいは積干や杭干それぞれにおける各種の方法を形態的に分類して，そのすべてを写真で示すところにある。まず，鎌による収穫作業が結束の方法，大きさを中心に概観されたのち，それぞれが以下のように分類され詳述されている。なお，分類目の言葉は必ずしも著者のそれとは同じでなく，ここでの説明上適宜変えた。また，（　）内の数字は，それぞれの分類における写真のうち重複分を除いた葉数であるが，その数は収録されている形態の数でもある。

地干……平置き（14），株干（穂を下にする）（12），島状に集めたもの（18），さおを曲げるなどして穂をのせたもの（10）

積干……形態的に分類されているが，ここでは省略（39），形態的な分類の他に積干作業を説明する写真（22）がある。

杭干……分類よりも作業に記述の重点が置かれている（36）。形態は大きく2つに分けられ，稲を90°ずつずらせるもの（10）と一定角度ずらせてらせん状にするもの（5）がある。

架干……2種類の分類方法がとられている。ひとつは，稲把の掛け方による方法で，把を割ってさおに掛けるものと，把を割らずに草丈の中ほどを曲げるようにしてさおにのせるものとに分けられ，前者はさらにいくつかに分けられる。いまひとつは，ハサの構造なり構築の方法によるもので，単段，多段あるいは垂直型，傾斜型と分けられる。架干に関する章は，稲架の用材と構造（28），架干の作業（18），各種のハサ（75）からなっている。

本書の記述なり構成が，形態分類的になっているため，紹介文もまた分類的な説明に紙数をさいてしまったが，惜しむらくは，それぞれの形態の乾燥方式が，その地域における気候・水田条件あるいは脱穀調

*ほりお　ひさし，神戸大学農学部

製作業や裏作作業との関連でとらえられていたならば，本書に収められている貴重な写真357葉にさらに生気が与えられたものと思われるのである。形態的な分類は，時として過誤に陥る。例えば，写真164に示された「井桁積」は本書でも述べられているように，平置きで地干しをしているときの降雨や露，霜を回避する一時的な積み方である。積干そのものはある期間の貯蔵を兼ねた乾燥方法であるから，形態的にはたしかに積むであるが，本質的に積干の範疇に入るものでない。また，積干のなかで「小積み」という呼称があり，これは「大積み」に対するものであるが，大型のニホは，千歯扱き以前の脱穀用具，扱はしの段階で脱穀の作業能率があがらず貯蔵が長期間にわたるためニホも大型のものがつくられたが，脱穀技術の発展とともに「大積み」は消え，「小積み」だけが残ったと考えられる。単なる形態的な大小にとどまる問題ではない。

このように批評するのは簡単であるが，慣行農作業を記録しまとめるのは容易なことではなく，本書の価値がいささかも下がるものではない。各種の慣行乾燥方式の近世における事情を詳しく伝えているものに土屋又三郎『耕稼春秋』（1707）（『日本農書全集』第4巻所収）がある。その記載は加賀藩におけるものに限られてはいるが，そうした史料と慣行農作業の調査結果を結びつけるのも，慣行作業研究の1方法であろうと考えられるわけで，ここに提起しておきたい。

なお，ご存じのことであろうが，稲作の慣行収穫法に関する調査が昭和47～49年に行なわれており，その成果は『水稲慣行収穫法』（昭50）に報告され，また府県別についてまとめた報告が昭和51年から56年にかけての『農作業研究』誌に掲載されている。これらを合わせてみれば，本書をより有効に活用できると思われる。

『ハサとニホ』の入手をご希望の方は，氏名・連絡先を明記し，昭和59年12月末までに下記へお問合せ下さい。

〒591 堺市百舌鳥梅町4～804
大阪府立大学農学部附属農場
稲野藤一郎氏